

B型肝炎について



B型肝炎ってどんな病気？症状や経過は？

B型肝炎とは B 型肝炎ウイルスが、血液や体液を介して感染して肝炎を起こす病気です。肝炎を起こすと疲れやすくなったり、黄疸（おうだん）、発熱などが見られます。ただし症状はごく軽い場合もあります。

キャリア（持続感染:ウイルスを体内に保有した状態）になると、慢性肝炎になりやすく、将来、肝硬変から肝臓がんに行進することがあります。また、急性に発病した肝炎が急激に非常に重い症状になることがあります。劇症肝炎と呼ばれ、生命が危険になります。

B 型肝炎ウイルスに感染しても、誰もがキャリアになるわけではありません。しかし、赤ちゃん、とくに 3 歳未満の乳児が B 型肝炎ウイルスに感染すると、キャリアになる危険性がずっと高くなります。

感染経路は B 型肝炎を持った母親から分娩の時に子どもにうつったり（母子感染）、父親や家族や友人、ウイルスに汚染された血液の輸血や性行為などでの感染（水平感染）が知られています。しかし原因不明のこともよくあり、特に子どもの場合は原因不明のことが多いとされます。

予防は？

B 型肝炎ワクチン（任意接種、不活化ワクチン） で予防します。B 型肝炎を予防することは、肝臓がんを予防することにもなります。

B 型肝炎は母子感染や水平感染だけではなく、知らない間にかかることも多いので、WHO（世界保健機関）では、1992 年に世界中の子どもたちに対して生まれたらすぐに国の定期接種として接種するように指示しています。そして世界中の多くの国では定期接種になっています。しかし、日本では任意接種です。以前は、家族に B 型肝炎ウイルスに感染している方がいる場合は勧めていましたが、家族にいない場合は B 型肝炎ワクチンを勧めていませんでした。家族の方以外から B 型肝炎ウイルスを感染する可能性は低いですがゼロではなく、それを予防する目的で（現在任意のワクチンで自費ですが）できれば B 型ワクチン接種をお勧めします。

接種時期と接種回数は？

日本では、母親が B 型肝炎キャリアの場合は、おそくとも生後 48 時間以内に産科施設で B 型肝炎予防用の免疫グロブリンを接種し、生後 2～3 ヶ月とその 1 ヶ月後と 3 ヶ月後に B 型肝炎ワクチンを 3 回接種します。（母子感染予防として健康保険で接種できます）。母親がキャリアでない場合は自費になりますが、生後 2 ヶ月からヒブ、小児用肺炎球菌、ロタウイルスワクチンとの同時接種が早く終わらせられてお勧めです。他より遅らせて接種開始してもかまいません。2012 年は B 型肝炎ワクチンの供給が足りなく、希望されてもすぐには接種できませんでした。

接種回数は、4 週間隔で 2 回、その後 20～24 週経ってから 1 回の合計 3 回です。十分な免疫を獲得するには 2 回目まででは不十分で、3 回目の接種が大事です。また、ワクチンの効果は 10～20 年前後とされています。学童期に追加接種をすることが望まれます。

